

## 第5回館長講座 『坪井正五郎と石器時代住民論争』

司会：お時間となりました。

今日は第5回館長講座となりますが、『坪井正五郎と石器時代住民論争 コロボックル論争をめぐる』ということで進めていきたいと思えます。それでは、鷹野館長、よろしくお願いします。

館長：皆さん、こんにちは。今日で5回目ですが、つい、このあいだ4回目を行った気がしますけれども、時間が短く感じられます。今日は『坪井正五郎と石器時代住民論争』ということで、明治時代の日本の考古学の牽引者だった坪井正五郎について、お話をいたします。

最初に、坪井正五郎とはどういう人かということですが、東京大学理学部の人類学教室の初代の主任教授で、明治時代の日本の考古学をリードした存在であります。

坪井正五郎の功績として、次の3つを挙げてみました。

まず、現在の「日本人類学会」を作ったということです。二つめに、考古学・人類学という学問の成果を、広く一般に普及せしめる努力をしたということです。それから、三つめはその一環でもありますが、石器時代住民論争の一方の旗頭<sup>はたがしら</sup>として、大いに論をふるったということでもあります。

坪井正五郎の年譜を見てもみますと、江戸時代末期の文久3年に江戸の両国で生まれました。父親は幕府の奥医師<sup>おくいし</sup>の坪井信良<sup>しんりょう</sup>という蘭学の医者、蘭医であり、明治10年に、ちょうどその年に大森貝塚が発掘されていますが、東京大学予備門に入学しています。その後、明治14年に東京大学理学部の生物学科に入学し、動物学を専攻します。明治17年に大学院に入り、今度は人類学というジャンルを専攻していきます。大学院を修了して、理学部の助手となりまして、助手時代にヨーロッパに留学し、帰国と同時に理学部の教授となり、その後、人類学会の会長となります。大正2年に、ロシアのペテルブルグ、私などはレニングラードと言ったほうがピンときますが、現在のサンクトペテルブルグにおいて開催された万国学士院連合大会に出席したんですが、急性穿孔性腹膜炎という病に倒れて亡くなっています。

さて、その坪井の3つの仕事を見ていきます。まず、人類学会ですが、明治17年10月12日に、坪井正五郎と白井光太郎、佐藤勇太郎、福家梅太郎の4人が発起人となって人類学会を創設しました。白井は後に植物学者になり、福家梅太郎は、農学者で、小豆島にオリーブの栽培を持ち込んだ人だそうです。ですから、必ずしも4人が4人とも、人類学に進んだというわけではなく、強い関心は持っていたのでしょうが、その専門としてはやっていませんでした。

そして、その後、6人が賛同者として加わりまして、10人で発足しました。レジュメの写真には10人いませんけれども、こういった人たちです。

もともと、坪井が大学の予備門に在学中に、同級生たちと知識の交換とか演説の練習とか、「懇親和楽」の目的の夜話会、要するに同好会みたいな目的をもって、会を設けたものが、しまいには、その会の中で、だんだんと古物や遺跡などに関する内容の話などが盛んになってきて、やがて古代の話をする会になっていき、そこで同好の士を語らって、新たに人類学・古代学の話だけが出来る会を設けようということになってできたのが、この人類学会でした。

最初から人類学会という名称だったわけではなく、当時は、ひらがな書きが流行していましたので、ひらがなで「じんるいがくのとも」としていましたが、大学への届け出上、4回目には「人類学研究会」、5回目以降は「人類学会」という名称での集まりになりました。

組織が大きくなって、明治19年2月からは「東京人類学会」、そして、昭和16年からは現在の「日本人類学会」と名前を変えてきました。

当初から機関誌も作っており、明治19年の2月に「東京人類学会」となったころから、「人類学会報告」、同年6月から「東京人類学会報告」、明治20年から「東京人類学雑誌」、そして明治44年からは現在の「人類学雑誌」という名称で作られています。

この人類学会の講演とか、人類学会の雑誌に掲載された論文をめぐって、明治時代の考古学・人類学の非常に盛んな活動が行われていました。

この頃の人類学というのは、現在の人類学と名称は同じかもしれませんが、人に関することを何でも扱うという人類学だったんです。人類の歴史、生活、それから人の形・形態もすべてひっくるめて人類学という中で扱っていました。

やがて、人類学が細分化されていくに従って、人類学会からも、いくつかの学会・研究組織が分かれていきます。

「日本考古学会」、これは当時、東京師範学校の教授であった三宅米吉を中心にして、「考古学会」として1896年に設立されました。1941年1月に現在の日本考古学会と名を変えて、今にいたっております。これは人類学会の中でも、特に考古学的なことだけを語る人たちが、自分たちだけでやりたい、考古学のことだけを語りたくないという気持ちを持つようになって、独立したということです。

それから、「日本文化人類学会」、これは現在の名称ですけれども、日本民族学会という組織が1934年に人類学会から分かれております。人類の文化を研究する文化人類学、それから社会人類学、民族学などの発展と普及を目的とする学会ということです。

文化人類学という言い方と、社会人類学という言い方がありまして、もともとは民族学かもしれませんが、社会人類学という言い方をするほうはイギリスの研究の流れ、文化人類学という言い方はアメリカの研究の流れを受け継いできたものです。結局、文化人類学会になったということは、アメリカ流の文化人類学が中心になってきたということでしょうか。

もともと日本民族学会として昭和9年に発足したのですけれども、2004年、12年ほど前から日本文化人類学会というようになりました。

それから「日本霊長類学会」が1985年に分かれていますし、1987年には日本生理人類学会、これは自然人類学会の中でも生理学的な観点からその本質を研究しようというものです。理学的な面でのということでしょうか。さらに最近では日本進化学会というのもできていますが、いずれも日本人類学会を母体として分かれていったものといえます。

要するに、坪井正五郎の人類学から、このようにいろんな分野の研究というのが広がるようになっていったということでもあります。

次に、2番目の考古学・人類学を普及せしめたということですが、坪井は頼まれると断ることなく、非常に多くの雑誌に、しかも分かりやすい文章で原稿を寄せていました。

斎藤忠先生の調べによりますと、坪井の原稿が掲載されたのが、レジュメに挙げたような雑誌なのですが、もちろん「人類学雑誌」や「考古学雑誌」、これは言うまでもないのですけれども、「東洋学芸雑誌」これは1881年の10月に創刊された自然科学を含む月刊誌で、日本で最初の学術総合雑誌と言われています。「理学協会雑誌」は理学協会という研究団体の専門的な雑誌ですけれども、他にも「太陽」、これは明治28年から昭和3年まで博文館が出していた総合雑誌で、政治・軍事・経済・社会情勢だけでなく、自然科学全般とか文学・風俗などの分野にいたる内容のものを網羅した雑誌でした。現在は平凡社で「太陽」という雑誌の名前は継続しております。

また、「国家教育」、「風俗画報」ですが、「風俗画報」は明治22年に創刊された日本で最初のグラフィック雑誌だそうです。「国民之友」は有名なところでして、徳富蘇峰とくみそほうが始めた評論の雑誌です。さらに「天地」や「東洋哲学」、それから「反省雑誌」ですが、これは現在の「中央公論」の前身だそうです。「中学世界」、「少年世界」、「女子の友」、「教師の友」、この辺は学校関係のところでしょうか、「中学世界」という雑誌は、当時の中学生ですから、今の高校生の年代を対象とする教育関係雑誌で、内容は多岐にわたるのですけれども、この雑誌の目的というのは、経済的な事情から中学に進学できないという子ども達、それから青少年を対象とする記事というのが頻繁に見られるところです。

それから「少年世界」は明治28年にできた雑誌で、昭和9年まで続くんですけれども、これも博文館発行です。論説・小説・学校案内・時事関係など多岐にわたる内容が盛られていまして、「少年世界」ということですが、読者対象も非常に多様だったということです。主筆が、巖谷小波いわやさざなみで、おとぎ話なども書きましたし、泉鏡花とか徳田秋声などの小説が掲載され、森田思軒もりたしけんが訳した『十五少年漂流記』、押川春浪とか桜井鷗村らの冒険小説が載ったり、そういう雑誌でした。

それから「裁縫雑誌」、これは裁縫ですから女学校で出した雑誌で、東京裁縫女学校出版部、現在の東京家政大学で出していた雑誌です。

「婦人衛生雑誌」「女学世界」「日本之小学教師」「をんな鑑」かがみなど、このようないろいろな特殊な刊行物にまで坪井の書いたものが掲載されていまして。

弥生土器のところでも触れました「帝国大学の隣地に貝塚の痕跡あり」と題するものも、こういう啓蒙活動の一環として捉えうるところです。

それから「東京人類学雑誌」には、「貝塚とは何であるか」というような概説書的なものも書かれています。人類学教室は『日本石器時代人民遺物発見地名表』というのを出していましたけれど、坪井正五郎が首唱して、主に唱えて作成したというものでした。また人類学会の雑誌の誌上で、読者の質問に答えるというような活動もしていました。

坪井は、考古学の分野の仕事として、各種の遺跡の発掘調査を行っています。その調査報告書は、極めて優れたものという評価がされるものでありますが、明治19年の夏に、栃木県足利市足利公園古墳群の発掘調査をしています。

この足利公園古墳群についても、第1号墳と第2号墳の調査の報告は「理学協会雑誌」に5回にわたって報告されていますし、また、「東京人類学会雑誌」にも再録されています。

この報告を見ますと、緒言から始まって、発掘の順序・古墳の性質・石室・石室の構造・人骨・副葬品である切り子玉・小玉・刀・小刀・矢鏃・他の鉄器・轡くつわ・環・他の金属器・第3号より出でし金属器・全景を見るべき土器・土器(破片)・埴輪の類、と項目を並べて書いており、最後に結論を示しています。

現在の古墳の調査報告書と、項目は同じとあってよく、遺物の記述も非常に詳細であり、考察も優れたものであったと言われています。

明治20年時点での仕事としては、まことに堂々たるものだというふうには言えるのではないのでしょうか。

足利公園古墳群は現在でも残っています。これが第1号古墳、この近くでは次の写真に出て来ますけど、坪井正五郎が掘ったということが掲示されています。この古墳群には、前方後円墳があります。わりあい規模の大きな円墳がありました。尾根の上に古墳がずらっと並んでいます。

これが坪井の調査した第1号墳で、石室は今でも開放しています。ここに、坪井正五郎の写真が貼ってあり、この古墳の説明が付けられていました。

ここが石室です。こういう石室があると、つい入ってみて、中から写真を撮るのが癖みたいなものですが、ここは入れませんでしたので、外側からの写真ですが、入り口の横にボタンがありましてボタンを押すと電気が付きます。そして、中がみられます。もちろん、発掘した後ですから、中に何かあるわけじゃなくて、石室だけですが、こういうふうに石を積み上げた横穴式のかなり立派な石室ですので、この土地のかんりの有力者のお墓だったのだらうと思います。

その他の古墳ですが、これも石室が開口しています。ここに書いてあるのは、ロータリークラブの説明板ですが、「公園内のあちこちに古墳があり、往古、かなり栄えた土地であったことが判ります。」という説明板が建っておりました。

先程の前方後円墳は、かなり整備されて残っていました。ちょっと怖かったのが、説明板の「イノシシ注意」の表示です。幸いにして、イノシシは出て来ませんでした。

こういう状態で、足利市自体が、足利公園古墳群を日本の古墳の調査の発祥の地という位置付けでしっかりと整備しているわけですが、遺物などについては多分、東京大学のほうに行っているはずですよ。

その他の調査として、埼玉県吉見町の吉見百穴よしみひゃくけつの調査、赤い同心円文の壁画がある福岡県の日岡古墳ひのおか、それから東京の北区の西ヶ原貝塚の調査も行っています。

坪井が手掛けた貝塚の調査としては、この西ヶ原貝塚が最初のもので、この西ヶ原貝塚の報告では、貝塚の位置、それから歴史・地質なども述べていまして、石器・土器も非常に細かく記述されており、その後の貝塚の報告書の形を作るということにもなりましたし、モース以来の報告書の内容を大きく前進させる意欲的なものでありました。

このほか、東京都の芝丸山古墳の調査なども行っています。

吉見百穴は、古墳時代の末期6世紀か7世紀くらいに作られたと言われる横穴墓群おうけつぼです。「よこあなぼ」ではなく「おうけつぼ」です。

大正12年に国の遺跡に指定されています。もともと、この横穴墓というのは、丘陵とか大地の斜面を掘り込んで墓としたものですが、死者を埋葬した主体部の構造というのは、古墳の横穴式石室と

ほとんど同じ構造です。この吉見百穴の分布する一帯は、凝灰質砂岩と呼ばれる非常に掘りやすい岩盤が広がっているところです。

明治 20 年に、坪井正五郎がこの吉見百穴を調査していますが、あまりちゃんとした記録が残っていません。現在確認できる洞穴の数が 219 あります。

現在は歩いて回れるように階段を付けられ、柵も付けられて整備されていますが、「明治 20 年、坪井正五郎博士による大発掘が行われその結果人骨・玉類・金属器・土器等が掘り出され横穴の性格を土蜘蛛人（コロポックル人）の住居でありのちに墓穴として利用されたものであると断定されました。」という説明がされています。

坪井正五郎は、この吉見百穴を見て、コロポックルの住まいというふう考えたわけです。土蜘蛛というのは日本書紀の中の異民族に対する呼び方ですけれども。

現在、この百穴は古墳時代の遺跡であると同時にヒカリゴケが自生している点でも有名ですし、それからレジュメの下の写真ですが、戦争中に軍需工場として広げられてしましまして、この辺にあった横穴墓は破壊されたのでしょうか。ヒカリゴケは今でも暗いところでうっすらと光を放っているのが観察できます。

それから、<sup>ひのおか</sup>日岡古墳の石室の一番奥、ここにこういう同心円状の円が描かれています。大きさは全長 74m、高さ 5m の装飾古墳といわれる古墳ですが、この奥の壁面に、ここでは赤しかよく見えないんですけども、赤・白・緑の三色で、同心円文とか蕨手文・三角形などの幾何学的な模様が描かれています。福岡県を代表する装飾古墳のひとつとして国の史跡に指定されています。

それから、もうひとつ、芝丸山古墳です。東京の芝公園にあります。これは街角の案内板の写真を撮ったもので、あまりきれいではないんですけども、浜松町の駅の近く、芝の増上寺のすぐ近くにあります。こういう街の中の掲示板にも載ってまして、ここに芝丸山古墳があります。これも、ちょっと大きい案内図ですが、東京タワーが建っていますが、その一角にあります。ここに芝丸山古墳があり、こっちが増上寺です。

この古墳は、全長 106m に及ぶ前方後円墳、非常に大きな古墳です。後円部の直径が 64m、前方部が幅 40m の規模です。ただし、現在は、墳頂部や後円部の西側などが削られてしましまして、築造当時の姿を留めていません。

明治 30 年から 31 年にかけて、坪井正五郎が墳頂部を調査しましたがけれども、後円部に存在すると思われていた埋葬施設は確認されませんでした。したがって詳細は不明ですが、出土した埴輪などから、5 世紀代の築造と推定されています。

昭和 54 年（1979 年）に東京都の史跡に指定されました。この報告は、明治 33 年の「東洋学芸雑誌」などに発表されています。

坪井は、発掘して報告書を発表しているわけですけれども、報告書を発表する前に東京都に対して発掘成果を報告して、それに合わせて古墳の保存計画案というのもし示しています。坪井正五郎が遺跡の保

存についても見識を持っていたことが伺われるわけです。

具体的な保存計画案といいますと、後円部の頂上、直径およそ 7 間の範囲に鉄柵を設けて、頂上に囲いを設けて、その囲いの中に前方後円墳や小円墳を 20 分の 1 の大きさの模型を作っておき、そして、その周りには鉄製で模造した埴輪を置いて、やってきた人がこれを見て、かつての姿を思い浮かべることができるようにしようという意図です。さらに小円墳についても鉄柵で囲んで木札の説明文を建てる。それから出土品については、東京市役所に置かれていたということですが、これを芝公園の中の適当なところに陳列して、一般の公衆の観覧に供するようにしよう、としました。

ただ、この陳列所はわざわざ新しく作らなくても、なるべく発見地、つまり古墳から遠くないところに出土品を置くということが本来の趣旨であると言っています。

また陳列所を作ったら、その陳列所には調査の報告書を置き、また、古墳の保存の意見を投射して表装して発見物に添えておくことを希望する、としました。つまり遺跡そのものがあって、そのそばにその遺跡から出土した遺物を展示し、それとともに、そこに報告書も置いて、そこに来た人には遺跡が全部理解できるようにしようという案を、東京市などに出しました。

しかし、坪井自身も、この案は理想論だとことわっておりまして、経費の都合によっては、もっと簡単にする方法もあるだろうとも言っています。実際の保存については、後で見てもらいますけど、坪井の理想論のとおりには行われていませんし、坪井の時代には、それぞれの古墳に石碑を建てて、古墳の番号・内部構造を見せるとか、出土品などを彫刻して示すということをしていましたが、最近行って見たところ、そんなものは残っていませんでした。

坪井は、洒落たところというか、狂歌を詠んでいまして、「遺跡にてよきものえんとあせるとき ころはせつきむねはどきどき」こんな歌を作って残しています。

この丸山古墳の現状なんですが、先程の足利公園とは違って整備されているとは言い難いところがあります。これは前方部への登り口のところです。坪井の理想論では、ここに囲いがあって、その中に模型が展示されているということだったはずですが、ここに碑があって、広い空間があるだけという感じでした。これは何かといいますと伊能忠敬の顕彰碑です。何か関係あるのかなと思うのですが、そして、前方部のほうに虎があってなんだろうなと思って後ろに回って見ましたら政治家の大野伴睦おおのぼんぼくの句碑です。この大野伴睦、東海道新幹線の駅を岐阜県に作ったことでも有名な人です。

さて、いよいよ、コロボックル論争になりますが、坪井は、この石器時代住民論争の一方の旗頭として、いろいろ議論を重ねていったわけです。日本列島の石器時代住民論、言い換えますと先住民族論、これは石器時代の遺物とともに、古くから関心に上っていきまして、これは前回もお話ししたとおりですが、江戸時代の大シーボルト (F. Siebold) は石器時代人というのはアイヌだと述べていますし、明治に来日した小シーボルト (H. Siebold) もこれを受け継ぎましてアイヌ説を補強しています。

ハインリッヒ・フォン・シーボルト、つまり小シーボルトのほうは、石器時代の土器、縄紋土器ですが、この土器の模様というのはアイヌ紋様と関係があるんだと、そして貝塚、これはアイヌ人の祖先が残したものであるという考えを示しています。

モース (E. S. Morse) は、これも前回出しましたが、貝塚を作ったのはアイヌの居住以前に日本に

住んでいた人たちであったとして、プレ・アイヌ説を唱えたわけです。大森貝塚の報告の中で人骨に傷が付いていたということから、大森貝塚を残した人たちが食人の風習があった、人の骨から肉を外して、あるいは骨を割って中の<sup>ずい</sup>髓を取るということをして食べたという風習があったという考えを持ちまして、これを各地での講演をする中でも進化論と共に話していたわけです。

ただ、貝塚を残したのが現在の日本人の祖先としますと、非常に反発があったのですけれども、そのことを避けたのか、現在の日本人とは直接関係のないアイヌ人が居住する以前に日本列島の住人だった人たちが、貝塚を残したのだという言い方をしていました。

それから、また、ジョン・ミルン (J. Milne) はイギリス人の地震学者ですけれども、石器時代の住人はアイヌだといっています、ミルン自身はアイヌ説の旗頭となっていきますが、その一方で、どこから持ってきたのかよく分からないのですが、北海道に残された竪穴住居とか土器や石器を作って使っていた人たちというのは、アイヌではなくてコロボックルだということを言っています。

ここにコロボックルというものが登場するわけです。

そして坪井正五郎のコロボックル論のきっかけとなったのが、渡瀬荘三郎が「人類学会報告」という雑誌の創刊号に載せた「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」という報告です。

ピットというのは、竪穴のことをいいます。この中で紹介した遺跡がアイヌのものではなくて、コロボックルのものだと主張したわけです。渡瀬荘三郎がなぜこれをコロボックルだと主張したのかという根拠はありません。渡瀬荘三郎は報告を書く前に、人類学会の集まりの中で報告をしているわけです。その報告をもとにこれが書かれているんですが、多分、人類学会で報告した時に坪井正五郎もそこにいたはずですが。反論せずに、うん、そうだね、というようなことだったのだと思いますが、坪井正五郎はどうしてこういうことに賛成をしたのか、これもよく分からないことではあります。

こういう報告に対して、人類学会の会員の一人である白井光太郎は、最初、「M. S生」というペンネームで、「コロボックル果タシテ北海道ニ住ミシヤ」と題する論文を、翌年の「人類学報告」に発表しました。白井は、この中で北海道の竪穴とか土器・石器は、コロボックルではなくて、アイヌの祖先の作ったもの、用いたものという主張をしました。

これに応じて、いよいよ坪井正五郎の登場となりますが、「コロボックル北海道に住みしなるべし」という題の反論を寄せました。カタカナで書くのも、ひらがなを使うのも、それぞれの主張があると思うんですけれども、コロボックルは北海道に住んでいたんだと、北海道に残る竪穴や土器はコロボックルのものかよく解りませんが。

それに対して、白井光太郎は、今度はそのまま読むと「<sup>かみかぜせんじん</sup>神風仙人」というのでしょうか、ペンネームで「コロボックル果タシテ内地ニ住ミシヤ」本州以南にもコロボックルは居たのかという再反論をしますが、坪井正五郎は真面目な方ですね、ちゃんと反論して「コロボックル内地に住みしなるべし」という具合でした。

こういう題のものが立て続けに「東京人類学会報告」などに掲載されていったのです。白井光太郎はそもそも、モースの食人の風習という説を聞いて、それに反発を覚えた一人です。それが本当かどうか確かめようということで、人類学に興味を持ったということです。

坪井と白井は人類学会を立ち上げた「同志」であるわけですがけれども、コロボックルをめぐるこういう対立をしました。

対立はこの場面だけではなくて、土器の名称をめぐるでも、白井光太郎は「縄紋土器」という言葉を使っていくんですけども、坪井正五郎は縄紋土器という言葉を使わずに「貝塚土器」、貝塚から出てくるので貝塚土器とか、縄紋ではないあれは<sup>むしろ</sup>蓆のようなものを押し付けた模様だということから、蓆の紋と書いて、「蓆紋土器」というような用語を使っていました。使う言葉の違いというのも、それぞれの主張を反映することがあったといえます。

コロボックルとは何かということですが、これはアイヌの伝説に出てくるこびとです。もともと「フキの葉の下の人」という意味で、確かに北海道のフキは、ものすごくでかいのもあります。あれを持って傘になるくらいの大きさのもありますし。

鳥居竜蔵がこのコロボックルの伝説を記録しています。「ここには、われわれ（アイヌ）より前にコロボックルというこびとが住んでいた。彼らは堅穴を掘って家とし、われわれは使わない石器や土器を作っていた。われわれとは交易関係があって、時々品物を持ってやってきたが、姿を見せるのを嫌っていた。ある夜間に、入り口から手を差し入れて品物を示し、われわれはその代わりに品物を渡した。あるとき、彼らの正体を見ようと思った若者たちは、窓から差し入れられた手を握ってとらえたところ、それは若い女であった。背は小さく、口のまわりや手に入れ墨をしていた。女がしきりに泣き叫んだので、若者たちが離してやったところ、彼女は自分の部落に帰ってアイヌの無法を話した。皆怒ってどこへともなく行ってしまった。今日残っている堅穴は彼らの住居跡であり、遺跡に残る土器と石器は彼らの使用したものである。なおわれわれの婦人の入れ墨は彼らの風を模したものである。」と、このような記録をしています。

レジュメの写真は、コロボックルの人形ですが、口のまわりに入れ墨をしたりして、土産物として売られています。こういう伝説なのです。要するにお話の中に出てくる存在であったわけです。

坪井正五郎がアイヌ説に対して、コロボックル説を主張する論拠としたことというのは、以下のような点からでした。

一つは、明治時代に生活していたアイヌの人たちは土器を使用していないし、石器を使っていない。二つめは、アイヌの家というのは、堅穴住居ではなく、アイヌは堅穴住居には住まない。3番目は日本各地の貝塚から人骨は出土するけれども、その中にアイヌ人と考えられる人骨は出土していない。それから、4番目ですが、アイヌ紋様、このアイヌ紋様というのは何を指すのか、具体的なものというのは何も無いんですけども、アイヌ紋様と貝塚土器、彼が言う貝塚土器は縄紋土器ですが、この土器の模様は同じではない。そして、5番目になりますが、貝塚から出土する土器や石器はアイヌの間でコロボックルのものであるという伝承がある、というようなことです。

これらが論拠になるのかということですが、特に5番目などは、伝説が正しいということになってしまいます。だから、これは学問的な態度とは少し違うんじゃないかと思うんですけども、こういうような点からコロボックル説というのは展開していったわけです。

それに対して、先程の白井光太郎を始めとして、小金井良精、この人は人類学者で星新一のおじいさんですが、それから浜田耕作や、坪井の弟子の鳥居竜蔵などから反対論が起きて来まして、だんだん坪井正五郎は孤立していきます。コロボックル説を唱えるのは坪井だけとなって行ってしまいます。



反対論として挙げられたのは、人類学者の小金井良精は貝塚から出土した人骨の研究をしていて、この中に人骨とアイヌとの共通性ということを主張していきます。また、すでに江戸時代の間宮林蔵とか松浦武四郎の記録の中に、アイヌが竪穴に住んでいる、土鍋を作る、土鍋ですから要するに土器ですね、これを作るとそういう例がすでに示されていたということも挙げています。

白井光太郎は、大森貝塚に扁平脛骨が見られることから、「大森貝塚はアイヌの遺跡たることは明瞭なり」と主張します。この白井の扁平脛骨の主張に対しまして坪井正五郎は、「コロボックルの脛骨もまた扁平であったと信じます」と、こういうように逐一反論するわけです。坪井正五郎は先程紹介しましたように2年ほどヨーロッパに留学するわけですが、留学中も多くの反コロボックル論というのが展開されていくわけですが、それに対して一つ一つ、海外から反論を寄せるということもしています。

それから、明治23年に佐藤<sup>しよみ</sup>部が、コロボックルが土器を作ったとすると、こびとにしては土器が大型だし、土器に残された指紋をみても、この指紋は普通の人の大きさであるという具体的な指摘も行い、コロボックルにはみえないと具体的なことも言うわけです。

そうした中で、コロボックル説に致命的なダメージを与えたのは、皮肉なことに坪井正五郎によってコロボックル説に有利な証拠を探して来いということで、北千島に派遣された坪井の弟子の鳥居竜蔵による調査結果だったのです。

明治32年に北千島の調査に行きまして、そこで鳥居が見たものは、北千島のアイヌが竪穴に住んでいる、そして土器も使っていることで、そのことを報告して、坪井のコロボックル説に反論したわけです。鳥居竜蔵という人は徳島の人ですが、東京で人類学会ができてそこで活発な議論がある事を知り、自分自身も「人類学雑誌」を取り寄せて読んだりして、そういう中で自分も勉強したいということで東京に出て行って、坪井正五郎の門を叩くわけです。

坪井正五郎のもとで、今はない副手という肩書をもらって、ほとんど無給同然だったのですが、坪井の下で仕事をする。やがて助手、助教授となっていくわけです。ですから、坪井正五郎は大恩人なわけですし、その大恩人の主張の正しさを証明するために派遣されたのですが、それは間違いだという結果だったわけです。

浜田耕作、この人は、後に京都帝国大学の総長になった人ですが、「日本石器時代人民の紋様とアイヌの紋様について」という論文を書きまして、この中でアイヌの紋様とそれから石器時代人民の紋様、具体的には土器に付けられている紋様、坪井は同じではないと言うけれどもそうじゃない、類似するところがある、もちろん違うところもある、そういう両方あるということを言っています。似ているところがある以上、それは似ているということを持ってアイヌ説を補強していくわけです。

やがて坪井は、大正2年に、先程紹介しましたように、ロシアのペテルブルクでの万国学士院連合大会に出席している中で、病気を発して亡くなってしましまして、坪井のコロボックル説は、結局、坪井のロシアでの客死とともに消滅していったわけです。

しかし、このコロボックル論争を通じて、日本の考古学界は多くのことを学んだと言えます。ひとつには、アイヌ説、コロボックル説、それぞれがそれぞれを補強するために、いくつもの新しい発見をしていったことであり、吉見百穴もコロボックルの住まいだという主張の根拠になるということでした。

それから二番目に、古代の遺物と民俗学的な資料を比較することが非常に重要だということが理解されたことであり、また、遺物を通じて古代の風俗習慣を考察する意義というのが分かっていますし、何よりも、日本全国に石器時代についての関心を広めたということが言えると思います。

現在、コロボックルを唱える人はいないし、それから、アイヌだという人も今はいません。日本列島の先住民、先住民ではなく、日本列島に居住していた人たちは、最近、沖縄の与那国島と、どこでしたでしょうか、船で渡って実験していますね、あれは紀元前 3 万年くらいのことを実験しようということだそうですけれども、大体その頃に日本列島に人が渡ってきて、その渡ってきた人たちと、その後、日本列島に渡ってきた人たちとのコミュニケーションということがあって、現在の日本列島の住人というのができてきています。

アイヌ説のその後はどうなのかということですが、坪井が亡くなったということで、石器時代人論はアイヌ説が全盛になっていくわけですが、これを推し進めていくと、どうしても戦前のことですから、日本の国というところの歴史と重なるというか、抵触するようなところがどうしても出てきます。

鳥居竜蔵や喜田貞吉、こういった人たちは、石器時代人・縄紋時代人というのはアイヌ人であって、次の弥生時代になって弥生土器を使う民族がいて、それが日本列島に住みついていた固有日本人だという主張をしました。つまり日本列島の住民に入れ替わりがあるという考えです。

しかし、大阪府国府遺跡を始め日本各地から人骨が多数出土するようになり、そして、大正 8 年以降、京都帝国大学の清野謙次、この人は人類学者ですが、人骨収集を目的とした縄紋時代の貝塚の発掘をしていく、資料を収集して統計的な方法で人骨研究を行っていきます。そうすると、石器時代人がアイヌだとする考え方は、だんだん衰えてきて、原日本人、もともと日本列島にいた人たちが縄紋時代の文化を担うという考え方が強くなっていきます。

大体そういうことだろうと思います、今でも。その後、先ほども言いましたように、いろいろと大陸からも半島からも人がやって来たりしているという時期もありましたし、そういった人たちの中で、われわれ日本列島の住人が出てきます。

余談ですが、この前報道されていた舟ですが、捉えられ方がちょっと違うというか、報道のされ方が違う。古代の舟で渡ってみたという実験だというように報道されていましたが、あれは違います、舟の実態が分からないんですから。今考えられる、当時あった材料で作るとすれば、ああいうふうになる。もしかしたら丸太にぶら下がって来たかも知れないし、必ずしも舟の形でなくたっていいですが、今、考えられる形として芦で作った舟を作ったということなので、あれが古代の人の航海の姿だとは思わないでください。今、実験をしたら、ああいうことだということです。

坪井正五郎の講演活動というか、その実際を見る機会がありました。坪井正五郎の講演の生の資料に接することができました。生の資料といっても、現代だったらここに映像が流れてということなのでしょうけれど、当時は明治時代ですから坪井の講演を筆記したノートというのを見ることができました。

経緯を言いますと、2004 年 10 月に、東京の「たばこと塩の博物館」の学芸員の方たちを通じまして、倉田陽子さんという方がお母様である長岡栄さんの遺品をお茶の水女子大学に寄贈して下さるという申し出があったのです。大学としては、それを引き受ける場がありましたので、ありがたくその申し出を受けました。

長岡栄さんは、女子高等師範学校の卒業生です。女子高等師範学校は、この後、東京女子高等師範学校になり、戦後、お茶の水女子大学になるわけですが、その卒業生だったわけです。

この長岡栄さんは、女高師を卒業された後、盛岡市の高等女学校に就職されました。寄贈された資料は女高師や盛岡の女学校時代のアルバムとか、小学校から女高師にいたる間の卒業証書、それから教員免許状とか辞令とか、ご主人が長岡擴さんという人ですが、その方の辞令とか、そういうものと一緒に女子高等師範学校時代に受けた講義のノートやレポートなどでした。

ちなみに、この長岡栄さんという方は、新劇の女優の長岡輝子さん、私の認識だとおばあさん俳優というか、おばあさん役ではピカイチの人だったという感じがしますが、その方のお母さんだった人です。

寄贈された資料の中に、土曜会というところでの「明治二十九年十一月一日夜 土曜会『日本石器時代の工芸美術及び人類に就きて』」という題の坪井正五郎の講話がありまして、それを筆記したノートがありました。この土曜会というのは、女子高等師範学校になる前、東京女子師範学校というその頃から、寄宿舎の中で、女高師には全国から学生がやって来ますので、東京近郊の居住者以外は寄宿舎に入っていました。今でいう、学生宿舎ですが、そこで、その宿舎内の懇親のために開かれていたもので、毎月1回、主として師範学校の教官を招待して開かれていたと言います。

だんだん、回が進むにつれて、単調になっていったようで、どちらかというとも勉強する会というよりも、むしろ懇親の場としての意義が大きくなったようです。

また、このノートに見られますように、外部の人を招いての講演会というのもあったようです。この土曜会は生徒が主催する会であったということが想像されますので、坪井正五郎もこの女子高等師範学校の生徒たちから招かれて講演をしたのかなということが想像されました。

このノートの中身を紹介します。全体は「日本石器時代の工芸美術及び人類に就きて」という題ですが、まず、「日本石器時代の美術及び工芸」という題で始まります。この中身は「人類学の研究は第一に記録、第二古物遺跡である」。どちらも重要なんだけど、「往昔人智未開の時」について研究する時には、古物遺跡にもつばらよるんだと言っていて、また、古物遺跡、考古学の資料ですが、これは一度失われると二度と得られないのだ、そういうものであるという考古学研究の宿命ともいえる課題についても触れています。実際、遺跡というのは発掘をすれば、ある程度成果を得られるでしょうけれども、また同じ発掘は出来ないんですね。いかに埋め戻しても全く同じ状態にはできない。つまり遺跡を発掘するというのは、ある意味、破壊行為でもあるということも、自覚していなければならないところでもあります。

次に「古物遺跡の種類」というところで、具体例を挙げながら、貝塚、土器、石器の3つについて説明をしまして、「古物遺跡の分布について」これは「貝類堆積」「遺物包合層」「遺物散列」の三者を挙げています。実際に遺跡の形として、現代では、それぞれ貝塚、遺物包合層と呼びます。「遺物散列」というのは、現在では遺物散布地といいます。

そして、いよいよ、人の話になって来ますが、「我が国には日本人に先立ち一種の野蛮人の住せし形跡あり」と、日本列島の先住民の存在を指摘するわけです。この先住民というのは「石器土器と共に出つる人骨を見るに、吾人の先祖及びアイノ人種の骨格とは大いに異なる」ところがあるとして、「数人のア

イノ人に就きて聞くも、その先祖より以前他人種ありし事を伝える」のですが、坪井自身が釧路で掘った堅穴住居からは土器や石器を得ていますから、そういうところから、アイヌ人は食器や土器を作らないので、アイヌ人と違って石器や土器を作ったり堅穴住居に生活する人種がいたということを示すものだとしています。

「その穴は円形または楕円形にして<sup>ふき</sup>藨の葉をもって屋根を葺き」と書いていまして、円形・楕円形はいいんですが、藨の葉をもって屋根を葺きというのは、何をもって論拠とするのか、たぶんコロボックルは藨の葉の下の人ということで使っているものと思いますが、だから、アイヌ人たちの間では、この土器を作り石器を作り堅穴住居に住んでいたような人たちのことを、場所によって違いますけれども、トイチセクル、トイチクル、コロボックル、クソロボックル、チセコッチャル等と呼ぶということを紹介しています。

続いて、「此等人種の風俗」、つまりコロボックルの風俗として、衣装とか髪、顔、それから<sup>しやこうき</sup>遮光器というものによる覆面のことを言っています。

遮光器ですが、この絵がノートの欄外に書いてあったんですけれども、多分、これは坪井正五郎がこういう絵を黒板にでも描いたのではないかと思うんですが、こういう眼鏡をかけた顔のようなんですけれども、要するに、遮光器、エスキモーの間で二本の板を目の前に渡しまして細いスリットをつくり、雪や氷の反射を受けないようにするものが遮光器というもので、縄紋時代の晩期の土偶の顔がちょうどそんな顔だということで遮光器土偶という言葉になったのですけど、そんな覆面をしたような土偶の顔から連想したことだと思うんですが。

そして、「気候が厳冽」だと、非常に厳しいんだということ、それから、彼らの食料源ですが、貝類を主とするけれども、山国では土器・石器と共に骨が堆積する所があるということから、「<sup>きんじゆう</sup>禽獣」、獣ですが、これも主な食物としていたということ。

農業はなかったので、「自然の穀物果実などを食せし」ており、穀物をつぶすのに<sup>うす</sup>臼のようなものを使っていたということを言います。この臼などのような同様の道具が、アメリカの内地では、今でもこういう道具によって、穀物をつぶす人種がいるという説明をしています。

堅穴住居、これは釧路地方だけでも、200から300は見られるといいます。見られるという言い方をしたのは、北海道の道東のほうでは、今でも堅穴住居が完全に埋まりきらない状態で見られます。春先に行きますと、窪みの中だけに雪が堆積して、幾つあるか見えるんです。普通は堅穴住居のくぼんだ所は、その中に土が積もって行って、あるいは葉っぱが落ちてだんだん埋れていくわけです。私自身、発掘調査をして、その発掘調査をした堅穴を一冬そのままにしておくと、ほとんど埋まってしまふことを体験しています。関東地方あたりでは、冬になると土の表面に霜柱が立ってそれが溶けると乾燥して風で飛び、堅穴の中に埋まっていくという状況を何回も経験しました。

北海道の道東ではそういうことがなくて、また、葉っぱが落ちても腐植土が簡単に形成されないということから、古いものでは縄紋時代の堅穴も残っているところがありました。そういうものが釧路あたりでも見られます。この講演の中で、坪井はコロボックルが千島からアラスカ、グリーンランドに移住して行ったという仮説を示します。

アイヌの伝説の中で、コロボックルがどこかへ行ってしまった、いなくなった、ということへの解釈なんでしょう。どこに行ったのかというと、もっと北のほうに行ってしまったんだと、そして、エスキ

モー、今はエスキモーではなくイヌイトですが、それとの比較を試みます。「此等人種のあとを訪ぬるに大いにエスキモーに類似せり。しかもアイノ人種には異なる点多し」ということを言っていて、中には、エスキモーは人形を作ることを好むけれども、アイヌ人はこれに反する、そういうことをしない。エスキモーは獣類の形を作らないけれども、アイヌ人はこれを作るとしています。さらに、漁業の方法はエスキモーとよく似ているとして、椎塚貝塚とか先程の西ヶ原貝塚から、「浮き袋の口」と通称される小さな土製品が出土するんですが、直径 2 cmか 3 cm くらいの円筒形というか、小さな遺物で風船の口にはめて、グイッと巻くと、ちょうどいいくらいの「浮き袋の口」と通称されるものがあるんですけども、それがエスキモーの遺物に同じようなものがあると、つまり椎塚貝塚、西ヶ原貝塚というのは、坪井正五郎に言わせると、コロボックルの残したものです、それと現在のエスキモーと似たような遺物があり、そういうことで遺物の共通性があると見ています。

また、「石器時代の住民は歯のあしかりしあと」つまり、虫歯が非常に多いということを指摘して、エスキモーというのが「世界中最も歯のあしき人種」で、世界中で最も歯が悪い、虫歯があった人種だということも言っていて、つまり石器時代の住民とエスキモーとの共通性ということを指摘しまして、一応の結論としているわけです。

つまり、コロボックルが前の伝説のようにどこかへ逃げてしまって、そして日本列島からいなくなって、エスキモーなんかと共通するようなどころに行くんです。だから、日本列島の先住民とエスキモーの文化は似たところがあるのだという主張です。

講演は、このあと、このコロボックル説というか、エスキモーとの関係で時間が迫ってきたのか、非常に簡単になってきていて、<sup>せきひ</sup>石七はテングノメシカヒと表記していましたが、それから<sup>いしきり</sup>石錐とか、<sup>いしやり</sup>石槍、<sup>せきぞく</sup>石鏃(ヤノネ)、<sup>いしおの</sup>石斧を図と一緒に紹介しています。これもノートに書いてあったのですが、テングノメシカヒとある石七です。ここがつまみの部分で、普通は上下逆さまにして使いますけれども、石のキリ、ホコ、ヤノネ、これは柄のあるのと無いものの図と石斧を示しています。

それから、土器の紋様についても、散列模様・並列模様・連続模様というような表現をして、3つに分けていますけれども、それぞれ、散列模様は日本人の好み、並列模様はアイノ人の好み、連続模様はヨーロッパ人の好みというようなことに対応させて説明していました。

また、土器の中に朱が蓄えられたものがありましたことから、「当時又絵の具の如きものあり」という説明をしたところで終わっています。この朱の説明のところにも、レジュメには示しませんでしたが、<sup>ちゅうこう</sup>注口土器のような図が添えられています。

『人類学会報告』などに載せられていた坪井の文章というのは、非常に分かりやすい口語体で書かれているものが多いです。ところが、この長岡栄さんのノートは、「～べからず」、「～ならず」、「～の如し」というような文語調で書かれていて、坪井が、講演の時だけ、こういう文語調の口調で言ったのか、坪井の言葉を一言一句残らず筆記されたのかどうか、それとも長岡さんなりにまとめたのか、また、その筆記されたものを語尾など文語調に改めて清書したものか、いろんな疑問はあるんですけども、このノートの文字自体は楷書できっちり書いたのではなくて、崩し字なんです。これを読んでいると古文書を解読するという感じでした。明治の半ばくらいの女学生たちが、まだまだ崩し字を使って書いていたということなんです。

私は古文書を読んだことがなくて、未だに読めませんが、ただ、この長岡さんのノート、一人

では読めませんでしたので、いろいろ助けを借りながら読んでいったら、なるほど、古文書を読むというのは、こういう楽しさがあるんだなということを実感した覚えがあります。この時一回だけなので、その後は経験していませんけれども。

ですから、博物館などで行われる古文書の講座などは、割合どこも人気があり、多くの人に参加されますけれども、その人気の理由というのは自分なりに分かったような気がしました。

なお、崩し字ではあっても、書きなぐったようなものではないので、これは清書したんじゃないかなとは思いますが。

でも、学生の中には、今はあまり見られませんが、30年くらい前の学生の中には、教授のことを全部ノートしていて、時には冗談や「ここで咳き」なんてことまでノートに書いてあるというような学生にも私自身も会ったことがありますし、ノートを見せられたことがあって、こんなこと言っているのというような、こんな調子で喋ったのかしらというようなことを痛感させられた覚えがあります。

坪井正五郎という人の唱えた説は、学説としては、残念ながら成立したわけではなかったですけども、坪井の様々な努力というのは現在の考古学にもつながっているのではないかなと思います。

ちょっと時間がありますが、今日のお話は、これで終わりとします。

司会：鷹野館長、ありがとうございました。お一人ぐらい質問を受けてもよろしいでしょうか。

何かお聞きしたいこと、ご質問があれば挙手をお願いしたいところですが、何かありませんでしょうか？

質問が無いようですので、今日の館長講座はここで終わりということにしたいと思います。

(拍手)

司会：次回の館長講座になりますけれども、8月13日、お盆の期間になりますけれども、『縄紋土器研究の進展』ということでお話しいたします。

また、来ていただきますよう、よろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

(拍手)